

# HB通信

編集・発行 /  
一般社団法人  
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通 4-22-25 兵庫人権会館 2階  
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281  
e-mail: blrhyg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhyg.org/>



## 所長の諏訪山だより

### 君主制か共和制かという「この国のかたち」

現天皇の生前譲位（退位）について、有識者会議による検討が行われているが、どうも現天皇に限り、生前譲位を特例法で認めるという方向になりそうだ。小泉政権でも、いわゆる「お世継ぎ問題」をめぐり、女性天皇を認めるかどうか議論になったが、秋篠宮家に男児が生まれ、この議論は即座に終息してしまった。

ところで、女性天皇の検討の際、右派の論者たちは代々の天皇が男系で続いてきたことを強調し、それが日本の守るべき伝統であり、もし女性天皇を認めて、その子が次代の天皇となれば、女系天皇が出現することとなり、男系は途絶えてしまうと、女性天皇案に真っ向から反対した。つまり、天皇は「125代」にわたって男系で続いてきたのであり、女性天皇は10代8人いたものの、それらはいずれも男系天皇であり、女性天皇の子であるという女系天皇は存在しなかったというのである。

はたして、そうであろうか。実際、女性天皇の男児がのちに天皇になったケース（女系男性天皇）だけでなく、女性天皇の女児が後に天皇となったケース（女系女性天皇）もあったのだ。女性天皇である皇極（35代）は舒明（34代）との間に天智（38代）と天武（40代）を産んだので、天智と天武は男系天皇であり、女系天皇でもある。また、女性天皇である元明（43代）は草壁皇子との間に元正（44代）と文武（42代）を産んだ。草壁皇子の父親は天武なので、元正と文武は男系天皇であるが、女系天皇でもあり、さらに元正は女性なので、女系女性天皇である。そして、元正と文武の父親は天皇ではなく、母親が天皇なのだから、元正と文武は、女系天皇であった点が強調されるべきではないか。そもそも神武（初代）の5代前はアマテラスなのだから、125代にわたる天皇はすべて女系なのだ。

皇室典範では、女性天皇や女系天皇は認められていない。ここでは、それを容認すべきだと、主張したいわけではない。男系という「伝統」にこだわり、女系天皇がいたことを無視する、保守派の主張の「くだらなさ」を指摘したいだけだ。男系が続こうが、途切れようが、そんなことはどうでもいい。いま議論し、考えなければならないのは、皇族として生まれてしまったり、男性皇族と結婚してしまった、皇族とされる19人の人たちが、表現の自由や職業選択の自由、居住・思想・信仰・結婚・離婚などの自由、そして参政権といった、当たり前の人権が認められていないことである。こうした人権が剥奪された生活を今後も皇族に押しつけることがいいのか、天皇制を廃止し、共和制国家となるのがいいのか、こうした議論を始めるべきなのではないか。

所長 石元清英



まんがのすゝめ

## 『フルーツ宅配便』ビックコミックス1～2（以下、続刊）

鈴木良雄 / 2016年 / 小学館 定価:552円 + 税

かわいいタイトル。絵のタッチも軽い。でも、アマゾンの紹介文は、次の通り。

『デリヘルから日本の“絶望”が見えてくる。現代社会で行き場のない貧困女子が流れ着く場所、デリバリー・ヘルス——もし、離婚して養育費を受け取れなかったら…もし、親の介護で、今の仕事を辞めたら……誰もが陥るかもしれない人生の困難、誰の手も届かない絶望と孤独が、ここにある』



なんとも重くて辛そうで、手に取るのがためらわれるが、シンプルな絵柄と、純朴で個性的なキャラクター設定のせいか、作品から受ける印象は、ずいぶん違う。

主人公の咲田は、東京で勤めていた会社が倒産し、故郷へ帰ってきた。懐かしさに誘われて、昔よく通ったラーメン屋で大好きだったネギ味噌チャーシュー麺を食べていると、この店の常連で、昔なじみの男が入ってくる。なにげない近況のやりとりから、男は咲田に「うちの店で働かないか」ともちかける。

「フルーツ宅配便」とは、男が営むデリヘルのお店名である。女性たちの源氏名はすべてくだもの。さまざまな事情を抱えた女性たちが、この店に登録し、働いている。

DV夫と口論の末、寝ている間にアイロンで顔を焼かれたあげく、逃げた夫の借金を押しつけられてしまった女性。容姿に自信がないのでお笑い芸人の道をめざし、芸能学校に入るお金を貯めるために働く女性。結婚の約束をしていた男の会社が倒産し、請われるまま勤めていた金融機関のお金を横領し、服役しなければならなくなった女性。苦しい家計の足しにと、夫に内緒で働く女性。離婚して養育費も滞ったまま、子どもを育てるために昼はスーパーで働き、夜、ここで働くシングルマザー——。

どの話も深刻で、確かに現代社会の闇を描いているには違いない。でも、作品の中の彼女たちは、しっかり「生きている」という印象が強い。男たちに翻弄され、陥ってしまった暗闇から這い出るために、ビジネスとして男たちに自身の女を提供する。

咲田をはじめ、フルーツ宅配便の従業員たちも、デリヘルで働く人、というイメージとはほど遠く、ビジネスライクではあるけれど、まじめでとぼけていて、暖かい。

苦しさも、不安も、涙ももちろんあるけど、彼女たちの日常には笑いもあるし、差し出される手のぬくもりもある。

「絶望と孤独」というよりも、そのしたたかさに希望が見える、そんな作品である。(K)

鋭意制作中&gt;&gt;&gt;&gt;

## 『これからの部落問題学習プログラム』（仮題）

【内容】

はじめに

- I. なぜ部落問題を教えるのか
- II. 部落問題の何を伝えるのか
- III. 部落の歴史を学ぶ、部落の歴史から学ぶ
- IV. 具体的な授業例の紹介 ほか

2017年3月刊行予定

編集：（社）ひょうご部落解放・人権研究所

発行：解放出版社



本の紹介

## 『いじめのある世界に生きる君たちへ』

—いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉—

中井久夫著、2016年12月、中央公論新社、1200円＋税

「いじめの政治学」という論文がある。本書の著者、中井久夫さんの『アリアドネからの糸』（みすず書房、1997年）に収められている。教育関係者やカウンセラーなどの中ではよく知られている論文で、「読むか読まないかでは、いじめへの対応がぜんぜん違って来る」と言われているそうだ（本書「構成・編集者によるあとがき」）。

本書は「私の論文を子どもが読めるようにしたい」という中井さんの思いを受けて、「いじめの政治学」を子ども向けに訳した本である。小学生高学年くらいから読めるように漢字にルビがふられ、いわさきちひろさんの絵が添えられている。

中井さんは、「いじめは、他人を支配し、言いなりにすること」で、そのための、実に巧妙で気づかれにくい仕組みがあると書く。そして、人間を追い詰め、心を破壊していくいじめの過程を、「孤立化」「無力化」「透明化」の三段階に分けて説明している。

加害者は、まずターゲットを決める。次に、ささいな身体の特徴や癖、根拠のない「けがれ」などを問題にし、「いじめられるのは、いじめられるだけの理由がある」というPR作戦で孤立させ、被害者自身にもそう思い込ませていく。そして、被害者が反撃にできれば過剰な暴力で罰し、誰も味方にならないことを繰り返し味あわせ、「反撃は一切無効だ」と観念させる。「このあたりから、いじめはだんだん透明化して、まわりの眼に見えなくなって」いく。「加害者のきげん一つで運命が決まるような毎日」の中で、被害者は加害者に隷属し、自分への信頼、誇りを失っていく——。

この過程を中井さんは「人間を奴隷にしてしまうプロセス」だと言い、ここに陥ってしまった者の「出口なし」感を、「ほとんどナチスの強制収容所なみです」と書いている。

また子どもと大人の時間感覚の落差について、「いじめの政治学」ではフランスの心理学者ポール・フレスの言葉を引き「年齢の二乗に反比例する」と書かれている。それに従えば、13歳の子どもの2年は50歳の大人の約30年に値する。「あと二年で卒業すると頭でわかっているけど」、それは「永遠のまだその向こう」のように思えるのだ。

中井さんは1995年の阪神・淡路大震災当時、精神科医として被災者の「心のケア」にあたってきた人である。被災者のPTSD理解に役立てばと、アメリカの精神科医ジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』を翻訳した。そうした過程で、自身の受けてきたいじめ体験が「ふつつつとよみがえった」。そしてそれは、当時62歳だった中井さんの中で、ほとんど風化していなかったという。「わたくしのように初老期までいじめの影響に苦しむ人間をこれ以上つくらぬ」ことを願って、「いじめの政治学」は書かれた。

本書の最後の項で中井さんは、対策について、「まずいじめられている子どもの安全の確保であり、孤立感の解消であり、二度と孤立させないという大人の責任ある保障の言葉であり、その実行である」と述べている。

子どもからのSOSがキャッチされる確率の低さについて、「太平洋の真ん中の漂流者の信号がキャッチされる」より高くない、とも指摘されているが、まわりの大人たちがいじめの構造を理解し、その精度を上げていくためにも、ぜひ読んでいただきたいと思う。

そして何より、渦中にいる子どもたちに、「生き延びる」支えになるよう、中井さんの思いが届いてほしいと切に願っている。

(H)



## ● 2016年度人権歴史マップ連続セミナー第5回

## 「ブラジル移民」

■講師：宮澤 之祐さん

(長岡京市立長岡中学校教員／元神戸新聞記者)

■日時：2017年1月21日(土) 14:00～15:30

■会場：海外移住と文化の交流センター

■参加資料代：【一般】800円【会員・定期購読・学生】500円

神戸港は、日本の玄関として多くの人を迎え入れると同時に、多くの人を送り出してきました。そのなかには世界各地へ移民として渡っていった人がたくさんいました。

日本の海外集団移民は1868(明治元)年のハワイ移民に始まります。その後、ハワイをはじめ北米、東アジア、東南アジア、オセアニアなどに多くの人々が渡ることになりました。しかし、20世紀に入ると米国、カナダ、オーストラリアなどで日本人移民への排斥運動が盛んになり、日本政府や受け入れ国側が移民を制限していきます。そうして、移民送出先が限られるなか、ブラジルが新たな移民先として注目されることになりました。ブラジルへの最初の移民は日露戦争後のことで、1908年4月28日、781名が神戸港から笠戸丸に乗船し、ブラジルへ渡りました。

ブラジルへ移民する人たちは乗船港の神戸に集合し、渡航しました。手続きが終わってから乗船するまで宿に泊まる必要があり、家族もいることから大きな出費となっていました。そこで政府は1928年、神戸の山手に国立神戸移民収容所を開設します。最大10日間の宿泊が可能で費用は無料でした。戦後、高度成長によって移民の希望者が減少し、1971年、最後の移民船ぶらじる丸の出航をもって閉鎖されました(何度か名称を変更し、閉鎖時は神戸移住センター)。

今回のセミナーではブラジル移民と、移民が築いた日系社会について、元神戸新聞記者で長岡京市立長岡中学校教員の宮澤之祐さんにご講演いただきます。会場は移住センターの建物を活用した「海外移住と文化の交流センター」となっており、無料で見学が可能です。



海外移住と文化の交流センター



神戸メリケンパークにあるブラジル移民を記念した「希望の船出像」

## 事務局から

- 12月10日に隣保館マルシェがありました。ホルモン鍋、すじの煮こごり、但馬牛の肉飯、バサの天ぷら、茶粥などなど、ムラの食文化が勢揃い！幸せでした。(K)
- トルコのパン屋さんには「必要だけどお金が払えない方は無料でどうぞ」という棚があるという。寄付をしたい人がお店にお金を預ける。受け取る人に配慮したイスラム的相互扶助の習慣だ。私たちに必要なのはきっとそういうことなのだと思ふ。(H)
- 最近、本を丸々1冊読み切ることが少なくなってきました。代わりにネットで文章を読むことが増えています。だんだんずぼらになっていきますね。反省反省……(Ka)
- 新年のスタートです。今年もよろしくお祈りします。ハジマリノサヨナラ。1年1年を大切なものにしていきたいなあと思ふ改めて感じるお年頃。(I)
- ポーランドの食器、ポーリッシュポタリーにメロメロです。丈夫で使いやすくて、しかもめっちゃかわいい♡ポーランド大好き♪(ひ)